

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考：アメリカ家族史から「発展」的親子関係史の問題性を考える

乙須, 翼

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻(アメリカ家族史)：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1904682>

出版情報：教育基礎学研究. 1, pp.33-58, 2004-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

－アメリカ家族史から「発展」的親子関係史の問題性を考える－

乙須 翼

はじめに

1970年代から80年代、イヴァン・イリイチやパウロ・フレイレらが、それまで「発展」や「進歩」の目標の一つともされていた近代学校、そしてその学校が作り出す「学校化社会」に警鐘を鳴らし、教育のオルタナティブを提唱した。開発分野において教育援助が本格的に取り組まれるようになったのは1950年代、1960年代のことで、その当時最も影響力を持っていたのが、パーソンズらの構造機能主義であった。彼らのイメージする近代化は「工業化に伴う社会の構造変化の総体であり、第一次産業から第二次、第三次産業へと比重が高まる傾向、市場の確立、大工場の比率向上、都市化の進行、専門的教育の普及、分業、専門化等々、工業化に伴う多様な構造的特質がイデオロギーの違いに関わらずあらわれる」とされた¹。そしてそのモデルとなったのは当時のアメリカ社会であった。つまり、「近代化論はアメリカ・モデルをもとにしてシステムの的に演繹的に組み立てられたもの」であり、教育援助もこの枠組みの中で行われていたのである²。

しかしながら、1970代に入っても近代化論に基づいた開発援助は、教育の分野も含めて、当初目標としていたような成果を出すことができずにいた。そして、必ずしもすべての国がアメリカと同じ道をたどるとは限らないことが認識させられるようになったのである。またそれと同時に、これまで拡大を続けてきた先進国側の近代学校においてもその問題性³が指摘されるようになり、近代化論に代わる理論が模索されることになったのである。

このようにアメリカ・モデルの近代化論が行き詰まりを見せつつある中、新しく従属理論⁴などが唱えられ始めることとなり、フレイレ、イリイチらもそのような状況の中から登場することとなった。すなわち、彼らの研究はそれまでの近代化論による教育開発の反省、そして「学校化社会」と化した先進国社会への内省を含んでいたのである。フレイレはラテン・アメリカの現状に立ち向かいつつ、近代学校が内包している「非人間化」の教育を問い、イリイチはアメリカ社会、近代社会そのものを批判的に検証した⁵。そして結果的に、両者は先進国の教育と発展途上国の教育開発の現場双方に疑問を投げかけることとなったの

である。

二人の研究からここで考えたいのは、先進国の価値観を問うことと、現在進行中の発展途上国の開発現場を考えることがつながっているという事実であり、その事の重大さである。つまり、自らフィールドに立つ人類学者や開発関係者のような直接的な関わりではないにせよ、歴史家も先進国側の価値観を歴史的に相対化していく作業を通じて、間接的に開発現場と関わり、またその関わりを問われる立場にあるということである。特にここでは近代学校を問う教育史、そして「近代家族」などより広い意味で子ども達を取り巻く環境を扱っている家族史や社会史全般に携わる人間が、先進国側が発展途上国の子ども達を対象にして行う教育開発と無関係ではないことを改めて確認したい。先進国側の人びとの中に形成される子どもをめぐる歴史観は、教育史や家族史、社会史が歴史叙述を通じて形成してきたものに他ならない。加えて、現在教育開発の議論の場における歴史的観点の有用性が指摘されつつあることも事実として述べておくことにする⁶。

地域に近代学校が導入され、その他の衛生観念や人口調節技術なども共にその社会に広がることにより、子どもや家族を取り巻く状況は大きく変化し、子どもと労働の関係や親子の関係も少なからず影響を受ける。そして時にはそれらの価値観のずれが大きな衝突を生み出す。しかし、それらの衝突を、学校の価値、子どもの人権、児童労働、そして子どもに対する親の権利や義務などの概念によって説明し、解決することは困難を極める。それは、それらの概念が基本的に「近代家族」や「近代的子ども観」といった西欧近代が作り出してきた価値観に基づいているということに起因している。もちろん、だからといって子どもたちの生存が脅かされ、搾取の対象とされている状態を見過すわけには行かない。しかし、イリイチやフレイレが指摘したように、普遍的価値を持つものとされた「近代的子ども観」や「近代家族」といった価値観の中で暮らす先進国の子どもたちでさえも、途上国の子どもたちとは異なる形ではあれ、学校や家族の中で苦しみを抱えながら生活している。言うなれば、学校への就学を促進し、児童労働やその他の搾取を批判するための基盤となる、子どもを巡る「近代的」価値観そのものが、それらが成立すると同時に潜在的に含み込んできた数々の問題の顕在化によって揺れつつあるのである。したがって、先進国、発展途上国の区別を超え、世界の子ども達を考える意味で、「近代家族」「近代的子ども観」といったものが特殊な価値観であるということをまず認識し、その特殊性を歴史的に検討することが必要なのである。

国際協力機関による教育開発は近代化論以後、発展途上国側の視点に立つ教育開発計画が常に模索、修正されてきている⁷。したがって、現在では先進国側の価値観の押し付けと

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

いう図式は極端であり、単純すぎるかもしれない。しかしながら、過去、アメリカ主導による教育開発が行われたことは確かであり、現在も先進国側の価値観を持った人々に関わるという点において変わりはない。そしてまたグローバリズムによって「アメリカ型価値観」が広がりつつあることも事実である。したがって筆者はアメリカ家族史の観点から、「近代家族」を問い直すことで、世界の子どもたちの今とこれからを考えていくことにしたい。

問題設定

以上に述べた問題関心から本稿では特に、「近代家族」における親子の関係を中心に見ていくことにする。家族の中でも親と子の関係は、その時代や社会的状況、そして子ども観が、個々の親の子どもに対する思いと交錯する場であり、他人との間では感じることはない幸福な感情を生み出すと共に、時に激しい衝突や、憎しみ、そして痛みを感じる関係でもある。しかしこれらの複雑な感情は、家族や子どもが置かれた状況が構造的に作り出し、そして近代においてより一層強化されてきたものだと言える。『<子供>の誕生』を書いたフィリップ・アリエスも「近代家族」の特徴を次のように述べる。

近代的家族は、反対に、世間から切り離されており、孤立した親子からなる集団として社会に対立している。この集団の全エネルギーは、何らの集合的野心もなく、子供たち、ことに子供たちそれぞれの向上に費やされるのであり、家族というよりはむしろ子供たちが中心なのである⁸。

「近代家族」において子ども達は強すぎる親の「エネルギー」を受ける存在となった。本稿で扱う「子ども中心 (child-centered)」とは以上のような「近代家族」での子どもの位置を示したものであり、親子関係を規定しているものでもある。しかしながら、その表現からも分かるように、「子ども中心」概念は非常に曖昧であり、具体的にどのような状況を表しているのか、アリエスのいう「エネルギー」とは何かなど分かりにくい点が多くある。実際に、多くの研究者が「近代家族」における子どもの状況を「子ども中心」と表現しながらも、その検討方法や、説明の中身はさまざまであり、統一した説明がなされているとは言いがたい。したがって、その「子ども中心」に規定されている親子関係の説明も不十分である。そしてこれから見るように、この「子ども中心」概念は、一層曖昧、かつ研究者の主観に基づく、親の「愛情」や「配慮」といった言葉に置き換えられることも多い。またそれから派生

して、近代以前は親は子どもを「労働力」として見なし、他方近代以降は子どもにかけがえのない「精神的」価値を求めようになったとする説明も多く見られる⁹。しかし、このような図式は「近代家族」の親子関係の特徴を正しく把握することができないばかりか、これから見ていくように、近代化論と合わさることにより単純な歴史観を形成してしまう。したがって本稿では、アメリカ家族史における「子ども中心」概念の議論を概観することで、そこに存在する問題点を指摘し、これからの課題を提示することとする。

1 アリエス解釈の問題点と親子関係史研究

(1) 単純化されたアリエス解釈—「無関心」から「愛情」「関心」へ—

アメリカ家族史における問題点を指摘する前にまず本節で検討しておきたいのが、アリエスが『<子供>の誕生』で指摘した近代における子ども観の特徴に対して、その後多くの研究者がよせた批判の中身を検討することである。アリエスの中世における子どもの処遇の説明に対して、多くの中世史家やその他の家族史家から強烈な批判が加えられたのは周知のとおりである。その批判の中でもおそらく多くの批判が寄せられたのは、「私たちが出発点としてとりあげている中世の社会では、子供期という観念は存在していなかった」¹⁰という部分であろうと思う。

しかし本稿で検討したいのは、子ども期の概念があったかどうかではなく、子ども期の議論と一緒に行われた、中世の親は子どもに「愛情」を向けていたかどうかという議論である。アリエス自身はある箇所ですべて「子供期という観念は、子供に対する愛情と混同されてはならない」¹¹と述べ、子ども期の有無と親の「愛情」の有無を一緒に考えているわけではないとしている。むしろ違う箇所では、他家奉公や見習い修業がまだ盛んに行われていた近代以前の家族と子どもとの関係を次のように述べている。

こうした状況のもとで、子供はごく早期に自分の生まれた家族のもとをはなれていたのであり、後に大人になってそこにもどることがあったにしても、それも常にそうだとはいえなかったのである。したがって、この時代に家族は、親子の間に深い実存的な感情を培うことはできなかった。このことは、親達がその子供たちを愛していなかったことを意味するのではなく、親達は家庭の設立にあたって、共同作業におけるこうした子供たちの協力にたいするのに比べれば、自分たち自身にたいして、また自分の子供たちがもたらす愛着にたいして、それほど意を払わなかったのである。家族は感情的というよりはむしろ、道徳的かつ社会的な現実であった¹²。

近代以前の家族には、感情的な強いつながりが生じる環境が存在せず、むしろ親子の感情的つながり以外のものが家族内にはたくさん存在し、それらが重視されていたというのがアリエスの見解であった。しかしながらその後『近代家族の形成』を書いたエドワード・ショーターは「フィリップ・アリエスは、母親が幼児に無関心であるのは、伝統社会の特徴であると最初に主張した人であった」¹³と評し、その後次のように続けた。

アリエスによれば、上流のブルジョワジーや貴族階級—アリエスはかれらの史料にもとづいている—の間で、幼児に対する考え方が変化したのは十六世紀から十七世紀にかけてである。おそらく彼の説は正しいと思われるが、私の関心は一般庶民にある。(中略)十八世紀から十九世紀初めの頃までは、どこの村々でも庶民階級の人々の間では、親は幼児に対して関心を持たないのが普通であった¹⁴。

ショーターはアリエスの時期区分を一世紀遅らせたものの、「伝統社会」の母親は「近代の母親とは異なり、優しさに満ちた心づかいをみせたり、幼児をはぐくみ、その人格を育成しようとして努力をしたりはしない」¹⁵という見解はアリエスと同じであると述べ、さらに「伝統社会」の子ども達は「日常的に虐げられた状態にあった」¹⁶と結論付けた。そしてその状況に変化を与えた原因として市場資本主義を挙げ、それらが「感情革命」をもたらし、そして「個人主義や愛情といった心性が生まれてきた」¹⁷という「無関心」から「愛情」へという図式を作り出し、それにアリエスまでをも巻き込んだのである。

以上に述べたような図式をアリエスが実際に描いていたかどうかの吟味は後ほど少しするとして、この図式をめぐるのは中世史家からの大きな反発を呼び起こし、そしてその批判の矛先はアリエスにも向けられた。そして、多くの研究者は中世においても親は子どもに「愛情」を持っていたことをさまざまな史料を用いて証明しようとしたのである¹⁸。つまりここにおいて、アリエスの言う子ども期が中世に存在していたか否かという議論と共に、子どもへの「愛情」や「関心」は近代社会の産物であるのか否か、「伝統社会」においてそれらの心性は見られたのか否かという議論までもが浮上することとなったのである。

アリエスへの批判として展開することとなった「愛情」を中心とする議論が何をもたらしたのか。それは、「愛情」の有無に集約することによって単純化されたアリエス解釈と、それによってますます見えにくくなった「子ども中心」概念である。ショーターは親子間の「愛情」を近代の産物とし、それに反論する研究者は「愛情」を全世界、全時代に共通なもの

とした。しかし当然のことながら、親子の「愛情」は辞書で定義できるようなものではなく、その形や表現方法も時代によってさまざまである。そこにきて研究者が「愛情」という言葉でその時代の親子関係のあり方を評価したとしても、それは近代以降の感覚からする「愛情」の基準、もしくは個人の研究者の定義する「愛情」でしかないということになる。また例え史料中に「愛情」という言葉が出てきていたとしても、その様態が現在と全く同じであると言うことは乱暴であり、その違いを説明することが必要とされる。結局のところ、「愛情」の有無によって「近代家族」の親子関係の特徴を説明しようとしたところで、どちらの主張も「近代家族」における「子ども中心」概念を説明したことにはならず、むしろ何が変わって何が変わらないのかを見えにくくしてしまったのである。

以上述べてきたように、アリエスへの批判として展開されることとなった「愛情」をめぐる議論は、アリエス解釈を単純化し、そして「子ども中心」概念の検討の障害となっていたのである。

(2) 「子供期への二つのまなざし」をめぐる混乱

(i) 「近代的孩子観の通説的理解」が生み出す誤解

今述べたように元々わかりにくかった「子ども中心」概念は「愛情」という一層曖昧な言葉で説明されることによって、ますます混乱することとなった。ここからは、以上のような混乱を克服するための一つの方策として、アリエスはそもそも親子関係に起きた変化としてどのようなことを挙げていたのかを検討してみたい。今さらアリエスという感があるかもしれないが、アリエス批判によって形成されてきた混乱であることを考えると無駄ではないと考える。

アリエスの記述を見直してみると、実はアリエスはドゥ・モースが歴史心理学と称して試みたような意味での親子関係の変化に直接言及しているわけではないということに気づく¹⁹。すなわち、社会全体の子ども期に対するまなざしの変化や、子どもや家族を取り巻く状況の変化については言及しているものの、一人の人間が親として生きて行く上で自分の子どもの人生をどのように考え、関わっていくかといった点にまでは立ち入っていない。はじめに少し述べたように、親子関係は子ども観や社会状況によってのみ説明できるものではない。そこにはそれらの影響を受けつつ、一人の人間としてさまざまなことを考え、感じながら子どもに向かう親がおり、親と子の人生は相互に重なり、関係し合いながら存在している。そういった意味で、アリエスは<子ども>に対する<大人>とは必ずしも一致しない<親>という存在をどこまで重視していたのかは定かではない。つまり、親

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

にとって「子ども中心」という現象とは何であるのか、といった点を検討しているとはいえない。それでもアリエスの述べた子ども観の変遷は親子関係の変化を説明するために必要な要素であるため、ここでは彼の言葉からそのヒントになる箇所を検討することとした。

アリエスが述べた中で最も親子関係に関連して重要な箇所は、「子供期への二つのまなざし」と題した部分である²⁰。彼は子ども期へのまなざしを二つの流れによって説明し、近代の子ども観の特徴を述べている。まず一つ目のまなざしについてアリエスは「可愛がり」のまなざしとして次のような説明を行っている。

子供はその純真さ、優しさ、ひょうきんさのゆえに、大人にとって楽しさとくつろぎのみなもと、いわば「愛らしさ」と呼び慣わされているようなものになっているのである²¹。

このような子どもへのまなざしは、「家庭環境の中や、幼児たちを相手にするさいに出現し」、13世紀頃に登場したとされる²²。そして二つめのまなざしについては、次のように述べる。

第二に見られる意識は、家庭の外部、すなわち十六世紀まではその数もわずかな教会ないしは法服貴族たち、また十七世紀にははるかに数を増した文明的で理性的な習俗を待ち望むモラリスト達に、源を発していたのである。かれらは子供期がかつて無視されていた現象に気づくようになってきたが、子供たちを魅惑的な玩具のごとくに見なすのを嫌ってもいた。というのも、かれらは、保存するばかりか造り直さなければならぬ神のもろい被造物をこの子供たちのうちに見ていたからである。この観念が続いて家庭生活の中に入ったのだった²³。

「可愛がり」のまなざしに続いて、それに対する批判を含みながら登場した教会関係者やモラリスト達の二つめのまなざしは、十八世紀になって、「衛生と身体的健康への配慮という新たな要素に結びつけられ」²⁴ることになる。そして「子供期とその独自性に対する愛着は、もはや楽しみ事とか「児童」という言葉ではなく、心理学的関心と道徳的配慮によって説明されるのである」²⁵と近代における子どもへのまなざしの特徴を述べている。

以上に述べた部分がアリエスが親子関係に関して述べたと思われる部分である。しかし、

この部分に関して多くの研究者がアリエスの意図を誤解したままであることを宮澤康人は指摘している²⁶。宮澤はまず日本語訳の問題をとりあげ、この部分で「感性を伴った、ものの見方ないしは対象への関わり方」という意味を持つフランス語の「サンチマン」が、「意識」や「まなざし」、「感覚」といった言葉に、文脈に応じて訳し分けられていることの問題性を指摘する。具体的には、「それは子どもに対する可愛がりというサンチマンを否定するような、全く新しいサンチマンである」と訳されるべき箇所が、「それは子供期の愛らしさという感覚を否定するような、実に新しい意識である」と訳されていることを挙げる。そしてこのような訳し分けが、「あたかもモラリストの態度が近代的であるのに対して、「可愛がり」が単純に前近代的態度であるかのような印象」を与え、アリエスの本意を誤解させるような状況を作り出しているという。

またこのような誤解は、日本語訳の問題だけではなく、アリエス以前の「近代的子ども観の通説的理解」の根深さにも起因していると述べる。ここで宮澤が述べる「通説的理解」とは、子どもを「自己の特性と必要を持った人格として」見る見方のみが近代的であるとする理解である。このような理解がアリエスの二つのまなざしが両者とも近代的であることを見落とさせてしまっていると指摘するのである。そしてこのようなこれまでの通説でこの部分を見てしまうことは、アリエスの提出した子ども観の独自性を失わせてしまうと宮澤は次のように述べる。

右のような誤解は、「可愛がり」の「サンチマン」もまた近代的でありうることを最初から認めないところに成り立っている。それゆえもう一つの近代的「サンチマン」がこれと共存し、葛藤し、あるいは相互浸透するかもしれない可能性について認識する道を閉ざしている。これはたぶん、近代の子ども観の、そしてその背後にある近代そのものの矛盾の存在に鈍感であることに関連している²⁷。

ここで宮澤が指摘しているのは、子どもを個人として「道徳的配慮」、「心理学的関心」をもって教育することが近代的子ども観であり、一つ目のまなざしである「可愛がり」は前近代の遺物であるとする歴史観の根深さである。そしてまた、その歴史観が覆い隠してしまったアリエスからの示唆を再認識する必要性なのである。

以上に述べてきた宮澤の理解を採用しアリエスを理解するならば、近代的子ども観は 13 世紀頃に子どもの周りにいた人たちの間で登場した「可愛がり」のまなざしとそれへの批判を含みながら 17 世紀頃に登場したモラリスト達による「心理学的関心」、そして健康と

衛生の概念が重なり合うことで成立したと考えられる。そしてそうやって成立した近代的子ども観には、二つのまなざしが矛盾や葛藤を繰り返しながら共存していることになるのである。

(ii) 親子関係史研究における「二つのまなざし」

では以上見てきたアリエスの近代的子ども観の説明と、親子関係史で展開されている「愛情」を巡る議論がどのような関係にあるのか、またそこにはどのような問題点が存在するのかを以下に見ていくことにしたい。

本来アリエスの近代的子ども観からのヒントを親子関係史において採用するならば、「可愛がり」のまなざしに二つ目のまなざしが重なることによって親子の関係にいかなる変化が及ぶこととなったのか、また、それらの二つのまなざしが引き起こす矛盾や葛藤を抱え込まれることになった親はどのような態度を子どもにとることになったのか、などが検討されなければならない。そしてこれらの問いに答えることこそが「近代家族」における親子関係の特徴、すなわち「子ども中心」概念を説明することにつながる。しかしながら、以下に述べるように、親子関係史において、アリエスからのヒントは有効に利用されているとは言えない。そしてその理由はここでもやはり、先ほど指摘した「愛情」をめぐる議論が生み出してしまった混乱に起因しているのである。さらに言えば、次節において明らかにするように、アメリカの「子ども中心」概念の議論も同じ混乱を引きずっているのである。

アリエスが述べた近代的子ども観の特徴を確認して、ショーターの「無関心」から「愛情」へといった主張を見直してみると、ショーターが二つのまなざしの存在も、その登場時期のずれも全く無視し、18世紀以前をすべて子どもへの「無関心」と「愛情」の欠如の時代としてまとめてしまったことがみてとれる。そして当然それに反論する研究者はそのような「愛情」欠如の時代の存在を否定する。すなわちここで交わされる議論は、「可愛がり」と「道徳的配慮」、「心理学的関心」の両まなざしが、「愛情」という言葉に集約され、それが近代において出現したと主張する側と、そもそも「愛情」は普遍である、と両まなざしの出現自体を否定する側の対立になってしまっているのである。したがって、「愛情」を中心として「子ども中心」概念を議論してきた親子関係史においては、先ほど見てきた「子ども観の通説的理解」が生み出す誤解以前の問題として、アリエスの二つのまなざしはほとんど生かされることがなかったと言える。そして当然、その二つのまなざしが引き起こす矛盾や葛藤なども意識されず、覆い隠されたままだったのである。

近代における親子関係の特徴をアリエスからのヒントを参考に問い直すならば、着目す

べきは、近代的孩子観を取り込んだ親の中の葛藤や矛盾の共存状態であり、説明すべきは、その共存によって親子の關係にいかなる変化が生じることとなったのか、という点である。そしてそうすることでようやくアリエスの議論を生かすこと、そしてアリエスを超えることも可能となるのである。

以上述べてきたようにアリエスが『<子供>の誕生』で主張した、中世には子ども期は存在しなかったというテーゼをめぐる展開した議論は、親子關係史においては、アリエスへの批判、反批判を繰り返すことで、「無関心」か「愛情」かという単純化された議論へと変質することとなった²⁸。そしてそのことにより「近代家族」の親子關係の特徴である「子ども中心」概念の検討は「愛情」といった曖昧な概念の有無の議論に終始し、その変化の中身が見えないままであった。また、アリエスがヒントとして残した子どもへの二つのまなざしの説明も十分に利用されることはなく、必然的に宮澤が指摘した近代の子ども観が内包する矛盾や葛藤を抱えることになった親の存在にも目を向けられてこなかったのである。そして次に見ていくように、アメリカ家族史においてもこの「愛情」の有無を中心とする「子ども中心」概念の議論は引き継がれてしまっているのである。

2 アメリカ家族史における「子ども中心」概念をめぐる議論

(1) アリエス理解とその適用に関する問題

ここからは、アメリカにおける「子ども中心」概念が、「愛情」をキー・ワードに説明されている状況を確認し、単純化されたアリエス理解がここでも引き継がれていることを確認する。また、アリエスの議論の適用をめぐる引き起こされるアメリカでのさらなる混乱状況を指摘することとする。

アメリカにおける「近代家族」は、18世紀後半から19世紀前半にかけて中流階級を中心に登場、成立したとされている。そしてその家族の特徴としては、デグラの説明を借りると、次のようになる。新しく出現した家族は、結婚は互いの愛情と尊敬に基づき、そこでは妻の役割と夫の役割が分離されている。そして、家族の規模はそれ以前よりも小さくなる。この三つの特徴に加えて次のような特徴が挙げられる。

この新しい近代家族では、両親の配慮、エネルギー、資力などが子供の養育に集中していくことになる。子供は大人とは異なる存在と見なされるようになり、物質的な面倒を見てやるだけでなく、愛情と心遣いを必要とするものとなった。すべての人にとり、子供の時代は貴重なものと見なされ、大人とはその性質も目的もはっきりと区別

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

されるようになった。こうして、親であることは人間としての大きな責任となり、重荷にさえなった²⁹。

以上の説明はデグラーのものであるが、多くの研究者がその検討方法や史料、そしてその登場時期には多少の違いがあるものの、ほぼ同様の説明を行っているため、アメリカにおける「近代家族」の特徴の説明であるといつてよい。以上の特徴の中でも最後に引用した箇所が、親子に関わる部分であり、「子ども中心」概念の説明であるといえる。厳密に言えば、ここには、子どもの特性を認識するというどちらかと言えば子ども観の議論と、「両親の配慮」や「エネルギー」、そして「愛情と心遣い」の子どもへの集中という親の態度の変化に関する議論が存在する。後者の議論に絞ってみていくと、アメリカにおいても「愛情」等の曖昧な表現によって「近代家族」における親子関係の特徴が説明されていることが分かる。

前節で見てきたアリエスをめぐって交わされた「愛情」の有無を中心とする議論は主に、中世の親子関係と「近代家族」の親子関係は「愛情」を指標として区分できるか否かが中心に議論されてきた。しかし、17世紀にその歴史の幕を開けたといつてよいアメリカにおいては、この問題がなぜか植民地時代と「近代家族」の誕生時期とされる19世紀前半の区分の問題として浮上することとなる。それでは以下にその様相を説明していくこととしたい。

アメリカ史の固有な問題として、アメリカの初期をそれ以前のヨーロッパの歴史とどのように結びつけるかという問いが存在する。そしてそれは教育史、家族史においても同様であった。これまでほとんどの研究者がアメリカの歴史の出発点として採用してきたのが、17世紀ニューイングランド植民地を中心とするピューリタン社会であった³⁰。プロテスタントの中でもカルヴァン派の流れを汲む彼らの信仰の中心的教義は、人間は生まれながらに罪を背負っているという原罪観であった。したがって、彼等にとっては子どもでさえも罪にまみれた憐れな人間であり、その罪深き性質をいかに神の力によって洗い流してもらえるかが人生の目標でもあり、子育ての目標でもあった。そして子育てもそのような人間観に基づき、甘やかしを嫌い、子どもが自分の意志の存在を気づく前に、親が子どもの「意志を砕く (breaking the will)」という厳格なものであったとされている。しかしながらその一方で、カトリックのような階層的な教会を排し、聖書を中心とした信仰生活を営む彼らにとって、聖書を読む能力を身に付けさせるための教育は子育ての大きな関心ごとであった。したがって、子どもの教育に対しては大きな情熱を傾け、説教やカテキズムを通して聖書の原理を教え込むという教育が家庭、教会、そして共同体が一体となり行われていた³¹。

以上のような特徴を持つピューリタン家族をヨーロッパとの関係でどの時代に位置づけるか、またアリエスの議論とどのように結びつけるかが問題となる³²。その際に重要となるのが、何を近代の指標として捉えるかという点であるが、親子関係史においては、「愛情」に言い換えられた「子ども中心」概念の登場が当然指標として採用される。しかし、以下に説明していくように「愛情」を指標としてピューリタンの親子関係を判断すると一つの問題が浮上する。

先ほど見たようにアリエスは13世紀と17世紀、そして18世紀を近代の子ども観を形成する節目としている。したがって、それとの関連を考えるならば、17世紀アメリカ植民地時代は、二つめのまなざしの登場直前、もしくはその登場時期とされるのが妥当であると考えられる。しかし、親子関係史ではその13世紀から18世紀の間に起こった変化が一つの「愛情」という概念の有無に集約するため、ピューリタン社会における「愛情」の有無が議論されることとなる。すなわち、ヨーロッパにおいては中世の親子関係を中心に議論されてきた「愛情」の問題がここではピューリタンの親子関係においてなされることとなる。さらにピューリタンの親子関係が特殊であることでこの問題はさらなる混乱の様相を呈してくる。

ピューリタンの残した史料からは、体罰も部分的に容認する彼らの子育ての厳格さ、そして甘やかしの否定といった姿勢が見て取れる。また彼らの親子関係は、神の代理として大きな権威が与えられた父親の支配と、子どもの絶対的服従に基づいているため、冷たい印象を受ける。したがって子育ての方法、というよりも子育てに見える親子の触れあいの表面的な雰囲気、研究者が「愛情」という曖昧な言葉によって判断した結果、ピューリタンの親子関係は「愛情」が表出されない、もしくは「愛情」のない親子関係として判断されることとなるのである。

このように判断することで、ピューリタンの親子関係はどちらかと言えば中世と同一視されることとなる。再びアリエスの論と絡めると、「愛情」という言葉で二つのまなざしの違いを覆い隠してしまった親子関係史においては、ピューリタン社会の親子関係は「可愛がり」以前の時期と評価される。つまり、アメリカの親子関係史においては、17世紀ピューリタンが、アリエスが13世紀とした「可愛がり」のまなざしの登場以前の時期として見なされる、といういわば「時代錯誤」とも言える事態が存在してきたのである。そして以下に見ていくように、このような事態を抱えたままアメリカの家族史研究はその後の「近代家族」成立の説明へと移っていくこととなる。

(2) 日記分析に見る親子関係史研究の問題点

以上述べてきたように、アメリカの親子関係史研究は近代の親子関係の基準として「愛情」を用い、それをピューリタンの子育てや親子の触れあいの中に見出そうとした。その結果、ピューリタン社会をアリエスの「可愛がり」以前の時期と見なすという事態を招くこととなった。このような事態を招き、「愛情」のないピューリタンから「愛情」あふれる 19 世紀の「近代家族」へという変化の流れを形成してきた原因の一つは、親子関係の変化と言いつつながら、子育て様式や子ども観の変化によってその大部分を説明し、また親子の触れあいの表面的な雰囲気から「愛情」の有無を判断するということを行ってきたことにある。すなわちここには親子関係史とは何であるかという根本的な議論が内在していたとも言える。

そもそもアメリカの家族史は、ヨーロッパの家族史の影響を受けながら、「主として人口学的特徴にもとづいて家族の構造を性格に描き出す」ことから、「価値観・信仰・個人的な人間関係といった家族の内的生活や、コミュニティの住民の行動を支えた意識」にその研究関心を移動させてきた³³。そして、もちろんこの重点の移動に重要な役割を果たしたのがアリエスのインパクトであり、それによって注目されることになったのが、子育ての様式や親子関係などであり、「愛情」のような感情、もしくは心性であった。

以上のような経緯で注目されることとなった心性を描き出すために、これまでほとんど史料学的価値があるものとして見なされていなかった、普通の人々の日記や手紙などが着目されることとなる。そして、「愛情」の有無の議論も主にこのような史料を用いる研究者によって展開されてきた。その中でもアリエスへの反論に大量の日記や手紙類を用いたポロックの研究³⁴は有名であるが、アメリカにおいてもそれらの史料を用いる研究者は非常に多い。そして当然のことながら、彼等は日記や手紙の文面の変化やその内容の変化に着目する。しかし、そもそも日記や手紙の記述の変化のみから親子関係の変化を説明しようとする研究には、その史料の表面的な雰囲気から人々の心性を研究者自身が感じ取り、説明しなければならぬという難点が付きまとっている。

その難点は具体的に言えば、史料の変化の掴み方の問題である。この点に関してはアリエスの二つのまなざしを想起してみれば明白である。つまり、日記や手紙の表現からは、「可愛がり」のまなざしと「心理学的関心」などを区別しながら抽出することは非常に難しい。したがって必然的に、アリエスの二つのまなざしは生かされることなく、「愛情」の有無の議論に舞い戻ってしまう。そしてさらなる問題は、二つのまなざしによって親子関係の変化を説明することが困難なために、結局、史料の中の子どもに関する記述の量やその表現方法によって親子関係の変化が判断されてしまうことにある。つまり、日記上の子ど

もに関する記述の量とその表現方法の変化によって親子関係が判断され、かつそれが「愛情」と評価されることで、親子関係の変化の中身が見えないままになってしまうのである。それでは以上のような問題を一つの研究を例にして少し考えていくことにしたい³⁵。

アメリカ家族史の場合、日記や手紙上の変化は、「近代家族」の登場時期とされる 18 世紀後半から 19 世紀の前半に見られると主張される。まず、その変化以前として出されるのがピューリタンの親の日記である。ただ、彼等の史料はあまり残っていないために牧師が自分の子ども達について書いた部分を中心に引用され、彼らの説教などと一緒に説明される。例えば次のような引用と、その解釈がなされる。

コットン・マザーが彼の日記に記録している一つの出来事は、子どもたちに降りかかるこのような断続的な病と死への両親の反応を示している。「おー私の罪よ (Alas, for my Sin)」マザーは彼の娘が家での事故によってひどくやけどをした時にこのように書いた。「神が私の子どもを火に投げ入れたのである (the just God throws my Child into the Fire!)」マザーの言葉は、幼児や子ども達の運命を決定する際の神の摂理に属した、逃れ得ない力を表している³⁶。

先ほど述べたようにピューリタンの子育ての基本は神の絶対的権威と原罪にまみれた人間という構図にあるため、以上の記述のように、人間の生死を初めとして、すべての行いは神との関係によって理解される。このような彼らの日記の文面のみを見ると彼らは子どもに対して悲しみを表すこともなく、「関心」もないかのように見ることができる。そして 18 世紀の中葉においては、次のような日記が引用される。(日本語に訳しにくいものもあり、英語の方がニュアンスがそのまま伝わるので特に訳さないでおく。)

Sept. 5, 1767. I was brought to bed about 20'clock AM of a daughter.

Sept. 6. The Child Baptized Mary.

Sept. 7. The Baby very well till ten o'clock in the evening & then taken with fits.

Sept. 8. The Baby remained ill all day.

Sept. 9. It died about 8 o'clock in the morning.

Sept. 10. Was buried.³⁷

このような子どもの誕生や洗礼、そして死などを淡々と記した日記を引用した後、「18 世

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

紀後半の女性の日記はほとんど子ども達がどのように見えるか、そしてどのように振舞ったかを述べていない³⁸とされ、日記の簡素さと子どもの成長に対する「関心」の欠如が指摘される。そしてそれは、厳格な子育て慣習と、神との関係、そして高すぎる乳幼児死亡率のせいであり、「愛情」が表出されない段階として説明されるのである。そして以下のような解説がなされる。

結果的に、18世紀の後半に母としての日記を残した女性は、アメリカの母親の歴史における移行期の姿 (transitional figures) となる。彼女たちは、植民地時代とアンテベラム期とに典型的に結びついたいくつかの価値と態度を共有している。彼らの説明は神の摂理に対する継続した信頼と平行して、増大する子どもへの愛情 (affection) と関心 (concern) を反映しているのである³⁹。

つまり、移行期としての18世紀後半の親たちは「愛情」や「関心」を少しずつ見せ始めている段階とされるのである。そして、その後19世紀に入り、乳幼児死亡率もわずかに回復し始めると、子どもを愛称で呼び、子どもの小さな表情や行動などの記述が増えてくることが指摘される。例えばそこでは次のような1848年の史料が引用される。

小さなフランシスは毎日どんどん興味深く (more interesting) 育っていつている。彼女は、あなたが彼女に言う言葉を全て真似して言おうとすることでしょ。彼女にあなたは誰の赤ちゃんですかと聞いたら、彼女は多分パパ、ママ・・・と言うでしょう。彼女は小さいいたずらっ子。彼女は彼女の靴や靴下を私が着せるのと同じぐらい早く脱ぎ捨てるでしょう⁴⁰。

そしてこの日記には「子どもの異なる性格や身体的な特徴が明らかに登場し始める」⁴¹という史料説明が加えられる。「可愛がり」とも「道徳的配慮」、「心理学的関心」ともとれる部分があるこの史料は、「愛情」や「関心」の現れとして説明され、それがピューリタン以後次第に現れるという流れが作られることになるのである。そして最終的には、「近代家族」成立への流れは次のような説明になる。

18世紀後半にはアメリカ人は次第に、初期アメリカのよく統制され、父親の支配と服従、そして感情的抑制を強調した父権支配の家族 (father-dominated family) か

ら驚くべき愛情(a strikingly affectionate)にあふれ、自意識的な私的な家族(self-consciously private family) 環境へと移行していく。そしてそこでは子どもたちは次第に優しい注意深さの対象となり、母親は彼等の道徳と身体的健康の管理者として登場したのである。・・神への信頼は次第に、より世俗化された考え方へと取って代わるのである。つまり、子どもの健康は愛情深く見守る(loving, watchful)母親の手の中にまずあるという考えである⁴²。

アメリカ初期ピューリタンの親子関係を厳格で冷たい家族とし、それとは対照的に「近代家族」を「愛情」あふれる家族とすることで、一方からもう一方への移行が明確な形で表されていることがここからは見て取れる。ここでできあがった大きな流れ、そしてその結論として導き出された「近代家族」の親子の形は最初に引用したテグラーの「子ども中心」の説明ともほぼ一致することがわかる。つまり、この結論は、異なる方法論や史料を用いる研究者の間でも共有されているものと言える。

以上見てきたようにアメリカ家族史における「子ども中心」概念も、「愛情」をキー・ワードとして用い、冷たい「無関心」から「愛情」へという図式を大部分継承してきたと言えるのである。

3 「子ども中心」概念の近代化論による説明の問題性

(1) 「近代家族」成立要因としての近代化

以上見てきたように、神に多くを委ねたピューリタンの厳格な家族が弱体化し、そして次第に「愛情」あふれる家族が誕生するという図式がアメリカの「近代家族」の大きな流れとして形成されていた。それでは、その変化の原因についてはどのようなことが言われているのだろうか。ここからはその原因に関する議論を中心に検討していきたい。

アメリカの「近代家族」の誕生は、先にも述べたように 18 世紀後半から 19 世紀前半に設定されている。したがって、その変化の原因もこの時期の社会状況の変化との関連で説明されてきており、その変化の中でも、独立革命の影響、宗教の世俗化、近代化の三つが主に主張されてきた。近代化については最後に詳しく述べるが、残りの二つについて以下に簡単に触れることにする。

まず、政治的变化を重要視する研究者は、独立革命時のイギリスに対する反家父長主義的雰囲気がそれまでの支配と服従といった権威主義的なピューリタン家族の父権を弱体化させたという仮説を立てる。そして当時の政治言説に家父長主義的家族像に変わって登

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

場した平等指向型の市民家族像が、中流階級を中心に浸透し、それまでの父親の絶対的な権力は弱体化し、平等主義的な人間関係へと家族内も変化していったと主張される⁴³。そしてその結果として、将来の市民である子どもも一人の権利を持った人間として認められるようになっていくと説明を行う。しかし、この立場に立つ研究者は言説分析や法的側面からの検討が主なため、独立革命によって実際にどの程度平等が達成されたか、また家族の内部はどの程度影響を受けたのかについては近年疑問が出されている⁴⁴。

もう一つは宗教の世俗化、というよりも宗教活動一般の変化である。先ほども触れたように 17 世紀植民地時代のピューリタン社会は、共同体全体が教会であるかのように、生活全体が神の偉大さと人間の自己否定によって支えられ、均質な信仰を持つ人々によって厳格にその教義が守られていた。しかしながら、その後の大量移民の流入や、原罪観に対する考え方の変化、理神論といった神の絶対的権威を脅かす存在が出現することにより、それまでのような厳格な宗教生活は保たれなくなっていく。このような変化の中、19 世紀の初頭に中流階級へと形成されつつあった「近代家族」は中流階級の女性のさまざまな社会運動や慈善活動を通してその他の階級へと広がり、「近代家族」的な価値観が主流となっていく、という説明が二つめの立場である⁴⁵。

それでは、最後に近代化論による説明を詳しく見ていくことにしたい。ショーターは市場資本主義をその「感情革命」の原因としたが、アメリカにおいてその変化の原因として最も影響力を持っていたのは近代化論であった。家族法制史を専門とするキャロル・シャマス(Carole Shammas)は「おそらく、家族史以上に近代化理論によって影響を受けてきた領域は存在しないであろう」⁴⁶と述べ、近代化論と家族史の強い結びつきを指摘する。近代化論は、はじめにの部分で述べたように、そもそもパーソンズらの研究によって作り出されたものであった。タマラ・ハレブン(Tamara Hareven)は次のように近代化論が作り出したこれまでの家族史の歴史観を説明する。

社会学者は特に次のような主張を行ってきた。前工業化社会において、一般的な世帯形態は拡大家族を含んでおり、そしてしばしば三世同居も含んでいた。そして核家族世帯構造と家族制限 (family limitation)、そして出生の間隔 (the spacing of children)、人口の流動化によって特徴付けられる「近代」家族は工業化の産物である、と⁴⁷。

このような近代化論による家族形態の変化の説明は、アメリカに関わらず強力な影響力を

乙 須 翼

もってきた説明であるといつてよい。そして、家族の役割と家族内部の人間関係の変化に焦点を移すと、次のような説明が一般的になされてきたとシャマスはスティーブン・ミンツ(Steven Mintz)の以下のような説明を引用する。

18世紀後半と19世紀初期は、私的領域と公的領域の境界の根本的な再定義を目撃することとなった。17世紀の初期において、家族の機能は広く、そして拡散していた。家族は基本的な社会の単位であった。子ども達を教育し、そして老いた人々や病人の面倒を見た。そして財産や技術を次の世代へと譲渡する。そして、最も重要なことは、家族は生産において経済的中心であった。19世紀初頭までに、家族外機能がこれらの機能の多くを担うようになった。そして中流階級の家族の主要な役割は、感情的な支援(emotional support)と愛情(affection)を提供すること、そして子どもたちの社会化に貢献することとなった⁴⁸。

ここに見られるのは、さまざまな機能を含んでいた拡大家族が次第にその機能を外化させ、家族は次第に感情の場となっていくというものである。しかし、このような説明はパーソンズ後の研究によっていくつかの点が修正されてきており、その中でも大きな修正はラスレットらを中心とするグループによって崩されることとなった、拡大家族から核家族へといった単純な流れである。家族復元法を用いたラスレットなどの成果によって、核家族がどの時代も優勢であったことが証明されたことは、周知のとおりである。そして、その成果はアメリカにおいても同じであり、初期の植民地時代の家族イメージは次第に修正されることとなった⁴⁹。その他にも「同居」や「世帯」、「親族」といった定義の中身を見直すことによって、社会の変化に対応する、家族の柔軟なストラテジーが明らかになってきている⁵⁰。

またその他にも、シャマスは近代化論が根拠としている19世紀の工業化そのものの存在についても疑問を投げかけている。これまでの近代化論による説明からいくと、工業化にあわせて家族はその形態や機能を変化させていったことになるが、アメリカにおいて農業よりも工業が主流となっていくのは19世紀も後半、もしくは20世紀に入ってからであるとシャマスは指摘しており、近代化論の説明の不十分さが露呈してきていると言える⁵¹。

以上、「近代家族」の形成要因に関しては独立革命の影響、宗教の世俗化といった要素と工業化がもたらす社会変化、つまり近代化論が合わさることによって説明されてきた様子を見てきた。また近代化論については、その妥当性に関して修正が施され、疑問が提出

されることで、その影響力が揺らぎつつあることも確認できた。近代化論の妥当性をここで吟味することは筆者の能力を超えるため、次にこの近代化論による説明がアメリカ家族史においていかなる問題を孕んできたのかを中心に検討することとしたい。

(2) アメリカ植民地時代家族史研究における近代化論の限界

ここからは、近年近代化論による親子関係史研究の限界性と問題性を指摘しているヘッシンガー(Rodney Hessinger)の議論を中心に見ていくことにする。彼はこれまでの近代化論を次のように説明する。

簡単に言えば、近代化論は伝統的な社会から近代的な社会への移行を、二つの別々の「理想型」を作り上げることで描写してきた。伝統的社会は安定的で農民を中心とした人間的 (personal) な社会として描かれる。(中略) 近代社会は変わり行く経済と政治の形態に適応力があり、非人間的 (impersonal) で労働が細分化されている社会として描かれる。そして、その理想型が示している特徴を備えた二つのかたまりは、相互排他的にみなされる傾向にあり、そして片方からもう一方への移行はしばしば複雑化していく近代社会によってたきつけられた、不可欠でそして直線のプロセスのように描かれるのである⁵²。

ここで説明されている流れは、先ほど見てきた近代化論とほぼ同じ流れであるといつてよい。ヘッシンガーはこのような近代化論がアメリカ家族史において大きな影響力を持ってきたことを指摘する一方で、近年の家族史研究が、南部植民地のプランテーション家族やプロテスタントでもクエーカー教徒の家族などの検討によって、上に述べた近代化論では説明できない、つまり近代化論に反証できるような証拠を多数積み上げてきた、と指摘する。そして、単純で直線的な説明の近代化論ではアメリカ家族史は説明できない状況にきていることを確認する。しかし一方で彼は、多種多様な植民地時代の家族の姿が明らかになり、近代化論が崩れつつあることで、家族史研究はジレンマを抱えこまされることになったとも指摘している。そのジレンマとは、あまりの多様さがアメリカ家族史としての統一した流れを説明することを困難にし、植民地期の研究者はその困難さを認識せざるをえないという事態である。そしてそのジレンマに対してはまだ近代化論に代わる理論を打ち立てることができていないというのが、ヘッシンガーの指摘する現在の家族史の状況である。また、ヘッシンガーはもう一つ重要な指摘を以下のようにする。

多くの家族史家が近代家族への移行を説明する際に、どの程度近代化論が納得できるものであるかについて疑問を呈してきた。しかしその一方で、ほとんどの研究者が「近代的な」家族の基本的な特徴については同意していた。時期についての議論は続いているものの、ほとんどの家族史家が近代家族の基本的形態が 19 世紀の中葉までには中流家族に登場するという点に関しては同意している。この家族の形態に対して彼らが提供した類型は、外面的な構造よりも内的生活にその主眼を置いたことを除けば、近代化論によって提供された理想型と大きく似ているのである⁵³。

このように述べた後ヘッシンガーは、2 の冒頭でも触れたデグラの「近代家族」の定義を引用し、近代化論の有効性が崩れた後においても、結局その「近代家族」の定義は近代化論によって導き出された結論と同じである、という指摘をするのである。

したがって近代化論は次第にその説明の妥当性やその影響について修正されてはきているが、それに代わる論がない限り、いまだアメリカ家族史において最も大きな影響力を持っている理論であると言えるのであり、それによって導き出された「近代家族」の説明は共有されているのである。

(3) 「愛情」をめぐる「発展」史観の危険と新しい研究視点の必要性

ここからは以上に指摘した「近代家族」の成立要因としての近代化論と、2 で検討した「愛情」を中心として語られた「子ども中心」概念が組み合わされることによって引き起こされた事態を指摘する。そして最後にその事態を克服するために必要な研究視点を述べることにする。

今見てきたように、アメリカの「近代家族」は近代化論によってその多くを説明し、そこでできあがった「近代家族」像はいまだに共通認識として存在していた。そしてその共通認識は親子関係に限ってみれば「子ども中心」という概念であり、「愛情」という言葉での説明であった。この近代化論と「愛情」が結びつくことによってもたらされるもの、それは「発展」的親子関係ともいえる歴史観である。すなわち、「伝統社会」の親は子どもに対して無関心であったが、近代化により「愛情」重視の家族が生まれ、親子の間にも「愛情」が生まれるようになったという図式がここにできあがることになる。また同じく、このような家族が中流階級の家族から次第にその他の階級に広がっていくという説明とも合わさることで、経済的余裕が子どもへの「愛情」を決定するという図式も暗に作られる

「近代家族」における「子ども中心 (child-centered)」概念の再考

こととなり、単純かつ危険な図式がここに登場する⁵⁴。

研究者が以上のような危険を意図的に作り出してはいないとしても、「愛情」という言葉はある一定の価値を含み込んでいる。したがって、むしろ無意識にそのような言葉を用いて「伝統社会」の親子関係と「近代家族」の親子関係の違いを説明することは非常に危険であるといえる。現代の感覚によって「伝統社会」の親子のあり方を判断し、それを「愛情」のない関係と説明する。ここで「伝統社会」といった言葉を、例え 18 世紀以前のヨーロッパ社会のみを指して用いるとしても、このような説明は近代以降に生きるものの傲慢とも言える説明である。ましてや「伝統社会」という言葉と近代化論とが結びつくことによって引き起こされる危険性は想像に難くない。

このことは、本稿のはじめに述べた点を思い返してみることでその重大性がよりはっきりと浮かび上がってくる。子どもに対する親や社会の態度を以上に述べたような近代化論で説明することによって、我々の中にはそれに沿った歴史観が形成される。そして、自分たち以外の家族関係をそれによって判断するといった危険を内包することになってしまう。実際に何百年か前の過去の自分たちの姿を、西欧以外の国の人達の中に、そして発展途上国の人達の中に見るというロマンティズム、もしくはオリエンタリズムは確実にこれまで存在してきた。さらに言えば、そのような「過去」の人びとを「我々の時代」に近づかせるために行われてきたのが、基本的に「開発」であった。したがって、歴史家が叙述するその言葉によって、人々の歴史観は形成され、家族史においてもそれは例外ではないということを実感しておかなければならないのである。

以上述べてきたことを考え合わせると、今家族史においては、家族や親子、そして子どもへの態度の歴史を「愛情」といった曖昧で、ある一定の価値を内包した言葉ではない形で説明することが目指されていることがわかる。そして、「近代家族」の親子関係の把握のためにも、これまでの「愛情」を中心とした「子ども中心」概念の説明では不十分なことは、これまで指摘してきたとおりである。それでは、以上のような課題を踏まえて、これからの親子関係史に必要な研究視点を最後に述べておくことにする。

まず、これまでのような単純な図式に陥らないためには、これまで「愛情」と称してきたような「近代家族」の親子関係が、親のいかなる変化から生じていたのかを問う視点が必要とされる。つまり、親にとって「子ども中心」という現象がいかなる意味を持ち、何がその現象をもたらしたのかを問うのである。親に着目するという視点は、それほど珍しくもないように思われるであろうが、先にも述べたように、これまで親子関係は親の日記の子どもに関する記述や子育て様式、子ども観の変化、そして教育思想などといったものによ

てその変化が説明されてきた。そこでは、その変化を実際に引き起こした親の心性の変化、親の生き方の変化を問うという視点が軽視されていた。

ここでいう親の心性、生き方の変化とは、大きく言えば近代社会が親に強いてきた生き方であり、その生き方の中身の検証である。そして具体的に例を挙げれば、1の最後で指摘したような、アリエスの言う子ども期への二つ目のまなざしが親に内包させた葛藤や矛盾といったものへの着目である⁵⁵。アメリカの家族、そして親子関係が19世紀初頭にそれまでとは異なる形へと変容したとすれば、それはどのような新しい生き方が親に要請された結果なのか、「近代家族」を生み出すこととなった社会の特殊性とは何なのかを認識しなければならない。そして、その特殊性を抱え込んだ親がどのような思いを抱き、子どもと接することになったのか、それを説明することが親にとっての「子ども中心」の意味、つまり「近代家族」の親子関係の説明になるのである⁵⁶。

少なくとも以上述べてきた研究視点を持つことで、「愛情」をめぐる「発展」史観、もしくは「発展」的親子関係史は乗り越えることができると考える。この研究視点によって史料を組み立てていくことで、「近代家族」の「子ども中心」概念の再考が可能になるのである。

4 おわりに

以上「近代家族」の親子関係の特徴である「子ども中心」概念をめぐる議論を、アメリカ家族史の問題点を指摘する形で進めて来た。そこでは「子ども中心」概念が「愛情」という言葉で置き換えられることにより、「近代家族」の親子関係の特徴が把握できない状況に陥っていた。そしてそればかりか、「愛情」というどちらかといえばポジティブな価値を含む言葉と「近代家族」の形成要因として用いられてきた近代化論が合わさることで、「近代家族」以前、もしくはそれ以外の家族関係を現在の価値観から評価するという危険を孕んでしまっていた。つまり、そこには、いわば「発展」的子ども観、もしくは「発展」的親子関係史とも言える状況が存在していたのである。

このような歴史観は家族史などの研究上の問題だけではなく、現在も世界中で行われている子どもをめぐる活動すべてに関わっている人々、もしくはそれ以外の人々の内にも形成される歴史観に関わってくる。したがって、自分たちが語る言葉によってある一定の歴史観が形成されるということの重要性とその危険性について、家族史に携わる人間がより自覚的になることが必要なのであり、そのような叙述が目指されるのである。

〔註〕

- 1 教育開発については、以下の文献を参考とした。江原裕美「第一章 開発と教育の歴史と課題—アメリカ「開発教育」の足跡をめぐって」江原裕美編『開発と教育—国際協力と子どもたちの未来』新評論、2001年、35頁 - 100頁。
- 2 同上書 35頁 - 56頁。
- 3 「ケームスは1968年に児童・生徒の急増、資金不足、コストの上昇、卒業生構成や教育内容など「出力」の不相当、無気力と非能率など、世界的な教育危機が見られることを報告している」と江原はまとめている。〔同上書 57頁。〕
- 4 従属理論とは、「近代社会と低開発社会とは、先進—後発という発展段階の違いではなく、搾取—被搾取という歴史的な構造のもとで、一方の開発が他方の低開発を作り出しているとする、1970年代頃からラテンアメリカを中心として提起された考え方」である。〔同上書 16頁。〕
- 5 フレイレ、イリイチの著作は多数あるが、ここでは代表的な二つの文献のみを挙げておく。〔パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』（小沢有作他訳）亜紀書房、1979年；イヴァン・イリイチ『脱学校の社会』（東洋他訳）東京創元社、1977年。〕
- 6 山本哲士は、「社会を実定化=固定してその中の文化を考察するのではなく、＜社会＞そのものがどう実定化されてきたのか、その変化を解きあかすことから文化の歴史を考え」という立場を提唱している。そしてそれを「[社会の文化史]アプローチ」と称し、そのアプローチをとることによって、「[社会]が文化プラチック／教育プラチックを作りだしていくという生成構造を対象化」できるようになり、イリイチの「学校化理論」では対象化されなかった部分が見えてくると述べ、社会主義国家における教育史の有用性について述べている。〔山本哲士「補章 教育開発の新たなビジョンを求めて」江原前掲書、321頁 - 356頁。〕
山本はここでは、開発の対象国となる国の教育を歴史的観点で問い直し、理解することを提唱しているが、この観点は社会史全般の有用性に通じるものであり、先進国側の「学校化社会」を問う場合も、近代学校のみならず、家族観や子ども観などのレベルからの検討が再び必要とされていることを示唆してくれている。
- 7 教育開発は、近代化論以降、従属理論・世界システム論、内発的発展論、ジェンダーと開発、人間開発といったパラダイムの変遷を経て、現在にいたっている。教育開発のアプローチの変遷については、江原が前掲書の第一章「表1 開発と教育をめぐる主なアプローチの特徴と変化」としてまとめているので、詳しくはそれを参照されたい。〔同上書 40頁。〕
- 8 フィリップ・アリエス『＜子供＞の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（杉山光信・杉山恵美子訳）みすず書房、1980年、379頁。
- 9 例えば心理学者の柏木恵子は『子どもという価値』の著作の中で、「子どもがほしい理由」などを世界数カ国で調査したアンケート結果をもとに、子どもの価値は「工業化の進展度」によって異なり、国が次第に工業化されてくると子どもに「実用的価値」を求めるよりも、「精神的価値」を求めるようになってくる、と結論付けている。〔柏木恵子『子どもという価値 少子化時代の女性の心理』中公新書、2001年。〕
その他にも途上国の児童労働批判や教育開発ボランティアなど、メディア等を通じて一般の人びとの間にもそのような構図が形成されているように思われる。

- 10 アリエス前掲書 122 頁。
- 11 同上書 122 頁。
- 12 同上書 346 頁。
- 13 エドワード・ショーター『近代家族の形成』（田中俊宏他訳）昭和堂、178 頁。
- 14 同上書 178 頁。
- 15 同上書 180 頁。
- 16 同上書 178 頁。
- 17 同上書 270 頁。
- 18 中世史家のこのような反応は多くあるがその中でも最近のものとしては、次の研究などがある。〔Shahar, Shulamith, *Childhood in the Middle Ages* (Routledge, 1990)〕
- 19 L. ドゥモース『親子関係の進化』（宮沢康人他訳）海鳴社、1990 年。
- 20 「子ども期への二つのまなざし」アリエス前掲書、122 頁 - 129 頁。
- 21 同上書 123 頁。
- 22 同上書 128 頁。
- 23 同上書 128 頁。
- 24 同上書 128 頁。
- 25 同上書 127 頁。
- 26 宮澤康人「アリエスの近代と子ども・家族・学校 -『<子供>の誕生』を超えるまえに-」宮沢康人編『社会史の中の子ども』新曜社、1988 年、23 頁 - 34 頁。
- 27 同上論文 25 頁。
- 28 ただ、次のようなハレブンの言葉もある。
 しかしながら近年、歴史家たちはアリエスの、18 世紀以前の西ヨーロッパ社会は、子どもへの無関心によって特徴付けられる、という主張に対して挑戦してきたのである。アリエスは死ぬ少し前に、もし僕が中世の史料を見ていたとしたら、近代初期の時期にサンチマン (sentiment) が出現するという結論は修正したかもしれない、と自身で認めている。
 この言葉からは、もしかしたらアリエスへの誤解ではなく、アリエス自身もそのように感じていたのかもしれないという疑念も浮かんでくる。〔Hareven, Tamara, K., “The History of the Family and the Complexity of Social Change”, *American Historical Review*, Vol.96 (Feb., 1991)p.98.〕
- 29 デグラ C・N「近代的な家族はいつ現れたか」デグラ他『愛と性と家族の歴史 アメリカの女たち』（立原宏要訳）教育社、1986 年、23 頁 - 25 頁。
- 30 ピューリタンという概念は定義が難しく、研究者によってその定義はさまざまであるが、ここでは、ピューリタンの中でもピルグリム・ファーザーズとして主にニューイングランド地方に居住したCongregationalism (会衆派) を中心として話を進める。
- 31 拙稿「ピューリタン社会が生み出す新たな親子関係—法と説教の両面から—」関一敏・西村明共編『内と外—共生社会学論叢 I—』九州大学大学院人間環境学府・共生社会学講座・文学部比較宗教学研究室、2003 年、16 頁 - 27 頁。
- 32 アリエスの研究後にピューリタン社会の検討を行ったデモスは、ピューリタンの子ども観をアリエスの中世の子ども観にならない「小さな大人」と表現し、17 世紀ニューイングランドの家族を中世と同一視した。〔Demos, John, *A Little Commonwealth: Family*

Life in Plymouth Colony(Harper Torchbooks, 1970)]

このように極端な見解はその後次第に修正されつつあるが、ピューリタンの子ども観は子どもの個性を無視した子ども観、教育観であるという評価は根強く、その意味でその後のロックヤルソーらの主張する近代的孩子観とは区別されることが多い。

教育史や家族史全般におけるアリエス以前の研究とその後のアリエス適用問題に関しては森田尚人が詳しくまとめている。[森田尚人「歴史のなかの子ども・家族・学校—アメリカ植民地時代の経験から」宮澤前掲書 157頁 - 224頁。]

33 同上論文 176頁。

34 L. A. ポロック『忘れられた子供たち』(中地克子訳) 勁草書房、1988年。

35 Dye, Nancy, S. and Smith, Daniel, B., "Mother Love and Infant Death, 1750-1920", *Journal of American History*, Vol.73 (Sep., 1986)

36 *Ibid.*, p.332.

37 *Ibid.*, p.334.

38 *Ibid.*, p.335.

39 *Ibid.*, p.333.

40 *Ibid.*, p.340.

41 *Ibid.*, p.340.

42 *Ibid.*, p.330.

43 Fliegelman, Jay, *Prodigals and Pilgrims: The American Revolution against Patriarchal Authority, 1750-1800* (Cambridge Univ., 1982)

44 しかし、シャマスは独立革命の影響は言説レベルにおいては確かに、それまでの父権支配への反感、そして平等主義的な思想が見られるようになるが、実際には女性や子ども、そして使用人といった家長に従属している人々にとっては、法的にはなんらの変化も及ばさなかったことを指摘する。[Shammas, Carole, "Anglo-American Household Government in Comparative Perspective", *William and Mary Quarterly*, Vol.52 (Jan., 1995)pp.128 - 133.]

45 グレヴンは宗教に対する親の態度の違いから子育て様式の違いを検討している。

[Greven, Philip, *The Protestant Temperament: Patterns of Childrearing, Religious Experience, and the Self in Early America* (Chicago Univ., 1979)]

また、宗教的な変化と中流階級の女性達の社会活動との関係から「近代家族」成立を検討したものには次のものが挙げられる。[Ryan, Mary, P., *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County*(Cambridge Univ., 1981)]

46 Shammas, *op. cit.*, p.134.

47 Hareven, *op. cit.*, p.96.

48 Mintz, Steven, "Regulating the American Family," *Journal of Family History*, Vol.14(1989) p.394 cited in Shammas, *op. cit.*, p.134.

49 森田前掲論文。

50 Hareven, *op. cit.*

51 Shammas, *op. cit.*, pp.134 - 137.

52 Hessinger, Rodney, "Problem and Promises: Colonial American Child Rearing and Modernization Theory", *Journal of Family History*, Vol.21(1996)p.125.

53 *Ibid.*, p.126.

54 中流階級からその他の層に「愛情」あふれる「近代家族」が広がっていくという図式は、これまでも一般的に受け入れられてきた図式である。しかし、例えば19世紀初頭から本格化し、20世紀に至るまで存続した工場での児童労働の問題を考えてみた場合、そこには、子ども達を「労働力」としてしか見ない貧困層や移民の親達と、「近代家族」の価値観を内面化し、「精神的価値」として子どもを大切に的中流階級の親達という単純な二項対立では説明できない状況がある。つまり、自分の子どもには「愛情」を集中させていくはずの経済的に裕福な工場主が、富のために他の子ども達を劣悪な状況で働かせる。そして、子どもは家族のために働くことが当然であると考える一方で、そのような劣悪な工場子どもを働かせることでしか生活できない労働者階級の親の苦悩や悲しみといった状況もある。このような状況が、これまでの「愛情」をめぐる「発展」史観では十分に理解出来ないことは明らかである。

児童労働論争における子どもの価値と労働との関係に関する意見や思想の対立の諸相については以下の文献を参照されたい。〔Zelizer, Viviana, A., “From Useful to Useless: Moral Conflict over Child Labor” in *Pricing The Priceless Child: The Changing Social Value of Children* (Basic Book, 1985)〕

55 アメリカの親子関係史研究において親の中に存在する両義的な感情に着目した研究はいくつかある。〔Walzer, John F., “A Period of Ambivalence: Eighteenth-Century American Childhood” in deMause, Lloyd, ed., *The History of Childhood* (Psychohistory Press, 1974):佐藤哲也「Godly Mother—ピューリタンの家族の母親像—」『兵庫教育大学研究紀要』第一分冊、17、1997年。〕

56 ヘッシングは、近代化論の代わりにアメリカ家族の変化、特に新しい親子関係の登場を説明する理論として「個人主義」の有効性を主張している。確かに「個人主義」は、筆者が述べるような意味での親に着目した親子関係の検討であり、その点においては有効性のある方策であるように思える。ただ、彼はその「個人主義」の中身と子どもとの関係について史料をもとに検証するところまでは着手していない。〔Hessinger, *op. cit.*〕